

書評

「日本人」だけではない日本社会

書評: 渡戸一郎・井沢泰樹編著. 2010.

『多民族化社会・日本(多文化共生)の社会的リアリティを問い直す』東京: 明石書店.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
向娥

多文化化、多言語化、多国籍化が急速に進む日本は、多民族化の道を進んでいる。本書は、グローバル化により現代日本社会はどのような変容を迎えようとしているのか、国民国家パラダイムはどのような修正を迫られるのかについて議論した書籍である。著者は、渡戸一郎、井沢泰樹ほか 10 名の社会学、医学、教育学専門家である。

本書は、序章とそれに続く 11 章で構成されている。

序章「多民族・多文化する日本社会」の著者は渡戸一郎であり、現在は明星大学の教授である。渡戸一郎は、現代の日本を多民族化社会と位置づけると述べている。日本社会における多民族化研究に向けたいくつかの基本的課題を整理しており、この研究の必要性は、歴史的背景から現代の移民のトランスナショナル視点まで、あらゆる側面から論じられている。

第一章「グローバル・マイグレーションと外国人・移民」では、渡戸一郎が、移民のトランスナショナルな移動一定住形態に関しては、それが起こる背景とメカニズムおよび出身社会や他の移住社会とのつながりの維持と再生産、これらを研究する必要があると述べている。

第二章「ニューカマーの体験・オールドカマーの記憶」の著者は井沢泰樹であり、現在は東洋大学の教授である。本章では、日本社会は少しずつ多国籍化してきている状況を指摘して、ニューカマーとの共通課題を検討する必要性を分析している。

第三章「外国人労働者と呼ばれる人びとの諸相」の著者は鈴木江理子であり、現在は国士舘大学の教授である。本章では、1980 年代後半以降を対象として、日本で働くさまざまな外国人労働者の状況を通時的に分析する。外国人労働者をめぐる問題点を抽出し、受け入れ政策の今後の動向を批判的に考察する。

第四章「定住化する外国人のライフコースと課題」では、ライフコース研究の視点で、定住外国人のエスニック・ビジネスの状況、定住化する多様な外国人結婚移住女性が突きつけている日本社会への課題について論じられている。著者は国際婚姻、多文化家族を研究している武田里子であり、現在は大阪経済法科大学の研究員である。

第五章は「外国につながる子ども・若者の生き方」である。著者は専修大学の教授藤原法子である。藤原法子は、国境を越えて移動する人々の子ども世代をめぐる問題と現在の多民族化・多文化化社会を生きるということ、トランスナショナルな世界を生きるということについて考えていく。

第六章は「地域社会の多文化・多民族化」である。本章では、群馬県と川崎市の事例とを取り上げて、日本の地域社会の多文化・多民族経験の位相について検討している。著者の広田

康生は専修大学人間科学部教授である。

第七章は「在日外国人というポジションと精神病理」である。在日外国人の精神病理の6つの例が取り上げられている。多様な移住形態と民族的文化的背景をもつ人びとの生き方を理解することの重要性を指摘している。著者は明治学院大学の教授阿倍裕である。

第八章は「問い直される日本人性」である。著者は法政大学の松尾知明教授である。松尾知明が、アメリカで展開する白人性研究の知見を手がかりに、「日本人性」を問いなおす新たなアプローチを具体的に提唱している。

第九章は「外国人の参加」である。著者は多文化共生課題を研究している加藤恵美である。本章では、加藤恵美が日本社会で暮らす外国人すなわち外国人住民の「参加」という「問題」の性格を明らかにしている。

第十章は「日本のトランスナショナリズムの位相」である。著者柏崎千佳子は、「多文化共生」の言説を、日本における移民・外国人支援運動の系譜に位置づけるとともに、移民の編入様式という観点から考察している。

第十一章は「外国人政策から移民政策へ」である。本章で、渡戸一郎は「ポストコロニアル」と多文化共生進展、二重の視点で「多民族化社会・日本」に求められる社会ビジョンを考察している。

本書において重要であると考えられる点は、以下の三つの指摘である。

一つ目は、「多文化」か「多文化・多民族化」かということである。1983年8月、当時の中曽根康弘首相が、韓国人がいる広島平和記念原爆養護ホームで「日本は単一民族だから泥棒が少ない」と発言し、広範な抗議を招いた。1980年代以降、差別待遇を批判する抗議運動の高まりや、ニューカマー外国人の急増とともに、日本は多様性を推進するようになった。政治家の単一民族発言への批判は相次ぐが、多文化・多民族の共生を支持する人の中にも、日本国民自身が多様な民族の集まりであることを認識できず、「単一民族国家」という幻想を抱いたままの人が少なくないようである。

「民族」という概念は17～18世紀の近代国家形成期に使われ始め、19世紀後半からナショナリズム(民族主義/国民主義)のイデオロギーによって普及したものであった。留意しておかねばならないのは、「民族」=「国民」という等式が近代国民国家の形成過程において歴史的に構築されたものだという点である。日本の場合、近代化の進展中「単一民族神話」の支配で、「国民」=「民族」=「日本人」という発想が強い。日本は「日本人」という単一で均質な民族で構成されているという「単一民族国家」観と、日本文化の多元性を否定するこの国家観は、共生を実現する上で大きな障害である。なぜなら、日本社会には「見えない人びと」がいるからである。「多民族化社会」という言葉を採用することは、日本が多民族社会であることを認めることになり、「単一民族国家」の思想に反するので、これを避けるためにソフトな「多文化共生」が採用された可能性がある。実際に、共に生きるべきなのは、文化ではなく、文化の担い手である人間ではないだろうか。本書は、「多国籍化・多言語化・多文化化」(14頁)の過程を「多民族化」と表現しようとしたようである。その意味で、本書は挑戦的な一冊である。

二つ目は、多民族化の進展を受けた日本の政治・政策的動向である。今後、少子化に伴う人口減少によって多民族共生が国家的課題となることは避けられない(柏崎「第十章」、渡戸「第十一章」)。21世紀の日本は、内発的な力だけでは、少子・高齢化による潜在成長力の低下、国内市場の縮小及び高齢負担の急増などの問題を克服することは、もはや困難である。

2005年以降、「新たな外国人労働者」受け入れの議論が本格化している。現行の研修・技能実習制度やEPAによる外国人労働者の入国数が拡大しつつあるが、在留期間更新の条件や雇用環境などの原因で、日本に長期間滞在できないという状況に陥っている。こうしてみると、帰国を前提とする「ローテーション」型に陥らないために、受け入れ条件の見直し等が必要である。「多文化共生政策」は外国人の定住化を目指し、少なくとも「労働」と「生活」の二つの場面が含まれている。「労働力」だけを利用して「生活者」としての再生産活動を出身国に押しつける受け入れ制度はあまりに身勝手な解決策ではないだろうか。なすべきことは、外国人を周縁化させない社会の仕組みづくりである(104頁)。人口移動を促すことで、日本への還流や定住も視野に入れられるような新たな人口移動を生み出す可能性を探るためには、外国人に関わる不公平の是正を進めることが不可欠であろう。

三つ目は、国家、民族領域だけではなく、家族および個人の領域も研究の対象としたことである。本書の目的は、日本における「外国人」や「人種的・民族的マイノリティ」を研究の「対象」「客体」に限定するのではなく、自明視されがちな「日本人」、「日本社会」を研究対象の俎上に乗せ、「民族複合社会としての日本」をどのように捉え、社会的ビジョンとしてどのように構想するかを考えることにある。民族複合社会としての日本をどのように把握し、社会像としてどのように構想するかを考える(4頁)。近代化の過程においては、国家や民族という枠組みが何よりも重要視されてきたが、多文化・多民族化する日本では、一人一人の人間を相互に理解し、尊重する発想も重要である。多民族化は公的領域と私的領域を問わず、また都市部だけでなく地方でも進行している。私たちは、外国人や移民を「隣人」として位置づけるとともに、地域からの「多文化共生社会」の創造に向けて「個」と「個」の新たな出会いと共同性の再構築を問いかけられている。(273頁)

最後に、本書は大学生や大学院生向けの入門書としての性格をもっている。難解な言葉や専門用語などは文中で説明する工夫をしている。多くの調査事例を挙げて、日本における多文化・多民族共生の問題について論じている。多文化・多民族の研究を志す者に勧めたい一冊である。

小熊英二. 1995. 『単一民族神話の起源』東京: 新曜社.